

エンジニアは世界滅亡の夢を見る

under_

目次

| | |
|----------|-----|
| 序 求人広告 | 3 |
| 一 再就職難民 | 4 |
| 二 秘密結社 | 18 |
| 三 復讐の始まり | 35 |
| 四 世界滅亡計画 | 50 |
| 五 抵抗運動 | 65 |
| 六 説得工作 | 78 |
| 七 夢の結末 | 90 |
| 結 夢のあと | 110 |

序 求人広告

秘密結社 サマードリーム

急募 幹部候補生！

地球の未来を共に守ってくれる仲間を募集しています。あなたの力で世界の滅亡を成し遂げましょう！

【業務内容】世界滅亡に関するあらゆる業務。高い裁量権によりあなたの才能が遺憾なく発揮できます。

【雇用区分】正社員（研修期間有り）

【必要な資格】なし。未経験者歓迎

【給与】年俸制（300万〜） 別途インセンティブ制度あり

【業務時間・休日】裁量労働制。原則週休二日。ただし、業務により残業・休日出勤あり。

駅前のハンバーガショップで少し遅い昼食を取りながら斜め読みしていた求人広告雑誌で、この小さな求人票が目に入ってきたものだから、口に含んでいたコーラを盛大に吹き出してしまった。

白い眼を向けてくる周りの客たちにへこへこ頭を下げつつ、飛び散ったコーラをナプキンで拭いた。

「な、なんだ……、これ？」

とにかく、突っ込みどころが多すぎる。業務内容が世界滅亡？ つまりこれは、テロリストになれっことで、完全に犯罪じゃないか！ しかも、本当に世界が滅亡してし

まったら、未来もなにもないだろう。それに、未経験者歓迎？ もし経験者なんていたら、それは既に世界が滅んでいるってことで、この求人広告も存在しようがない。それ以外にも、幹部候補生と言っておきながら、年収はたったの300万。インセンティブを含めたとしても、平社員だった前職の給与とたいして変わらないのではないか。役職に対する報酬がまったく釣り合っていない。そして何より、仮にも秘密結社と名乗っておきながら、街で配られている無料の求人雑誌に名前を載せてしまっただけなのか？ 連絡先のメールアドレスまで書かれているし……。

誰かのいたざらだろうと思いついて、前後のページを確認してみた。工場の作業員や、診療所の補助員、パン屋の調理師など、いたって普通の求人票が並んでいる。

「……なんだ、これ？」

もう一度、同じことを呟いてしまった。

世界滅亡などという反社会的な行為を促す秘密結社による、明らかに異質な求人票。

こんなものは無視するに限る。と、普通なら思うだろう。しかし、俺はスマホのメールアプリを立ち上げると、記載のメールアドレス宛に、すっかり推敲し尽くしていた履歴書を送った。

何故なら、俺も今無性に世界を滅ぼしたいと思っていたからだ。

一 再就職難民

1

二日前、セミも鳴き止む暑さの中、スーツを着込み、ネクタイもしっかりと結んで、面接に臨んだ。

とにかく、気合が入っていた。半年前、とある社員の不正をきっかけに経営が急激に悪化した前の会社から、人員整理対象とされて、追い出されるように退職した直後は、精神的にずいぶんと追いやられ、無気力な日々が続いた。

それでも預金通帳の残高が減っていくという不安から、転職エージェントを使って再就職活動を始めてみたもの、ことごとく書類選考で落とされると辛い日々が続いていた。そんな中、ようやく一社、一次面接にこぎつけることができたのだ。しかもその会社は、今をときめくカタベ製作所。家電から重工業、果ては宇宙産業まで手掛けている大企業だ。この国の大半の製造業がこぞって業績不振に苦しむ中、この会社だけは毎年右肩上がりの成長で、Katabe というロゴを見たことない者はこの国に存在しないと言っても過言ではない。今使っているスマホだってカタベ製だ。

そんな超優良企業の面接となれば、いやでも緊張するし、気合も入ろうというものだ。

面接は、人事担当の男性二人が相手だった。一人は黒縁メガネが目立つ中年男性、もう一人は俺よりも若い二十代

中頃の青年だった。

面接室に入るなり、俺は先制パンチとばかりに、大きな声を出した。

「高梨学です。本日はよろしくお願いたします」

「よろしくお願いたします」中年の人事担当が緊張感のない声で言った。「そこに腰掛けてください。……じゃあ、まずは弊社を希望した理由を聞かせてくれる？」

「はい。御社の『技術で人々に明るい未来を』という信念に強く共感いたしました。昨今、世界では様々な社会問題が山積していますが、それらを解決するのはやはり技術だと、俺……、ごほん、私は考えております。ですから、私もそのお手伝いがしたいと思えました」

この日のために必死に暗記した志望動機を、少し詰まりながらも答えた。

二人の面接官は、俯いたままボールペンで何やら書き込みをしていた。この無言の時間がとにかく緊張する。

ようやく、中年の人事担当が顔を上げた。「なるほど。

しかし前職であなたは……、えーっと、データセンターでしたっけ、そこでネットワークインフラに関する業務をしていた、と職務経歴書にありますね。弊社とはずいぶん分野が違うんじゃないですか？」

想定どおりの質問だ。

「はい、おっしゃる通りです。ですが、情報技術はどの産業分野においてもますます重要さを増しています。御社においても、コンシューマ向けのサービスや社内基幹シス

テムで、データセンターを活用していることと思います。昨今はクラウドサービスの台頭で、インフラ業務は不要になった言われることも多いですが、お客さまへ安心・安全の製品とサービスを届けるためには、他社に全てを委ねず、自社でも専門的な知識を持ってインフラ管理にあたることが必要不可欠と思います」

中年の人事担当は納得したように、こくこくと何度かうなずいた。続いて志望動機に関する質問がいくつか出たが、どれも想定通りで澁みなく答えることができた。

緊張もほぐれ、良い調子だと思えるようになった頃、それまでずっと黙ってメモを取っていた若い人事担当が口を開いた。

「では、あなたが弊社に対して具体的にどのような貢献ができるかお聞かせください」

「具体的に、ですか……」

初めて現れた想定外の質問に、心拍数がどつと上昇した。「ええ。つまり前職で得られたスキルをアピールしていただきたいのです。どうですか、プロジェクトマネージャーのご経験は？」

「プロジェクト、マネージャー……」

経験はなかった。前職では基本的に、部下たちは課長の命令と、決められた手続きを如何に忠実にこなすかが最も大きな評価項目だった。上長に対して業務改善を提案することもなくはなかったが、それはマネージャーの仕事と言えるのだろうか？

首筋に汗が伝っていくのを感じた。面接会場はエアコンが効いていないのだろうか？

必死に言葉を探していると、若い人事担当者は小さなため息を吐いた。

「あなたのように、三十代になりますと、弊社では即戦力、特にチームをまとめて課題を遂行するリーダーやマネージャーの能力を求めています。ですから、前職での経験を教えていただけると嬉しいのですが」

「えっ、えっと……」

過去の経験を強引に引つ張り出して、回答を捻り出したが、しどろもどろになってしまい、最後はかなり支離滅裂なことを口にしてしまっていた。

二人の面接官の顔から、こちらへの興味が薄れていくのが、はっきりと見てとることができた。

その後も、いくつか質問されたが、どう答えたのかまったく記憶に残っていない。

面接を受けた翌日、転職エージェント経由で、不採用が伝えられた。

2

カタベ製作所からの不採用通知が来た日の夜、俺は新田信宏を居酒屋に呼び出した。

彼は大学時代からの友人で、飲みには誘えば、身内に不幸がない限り、どんなに忙しくても必ず付き合ってくれる、

社交的で友だち想いの良い奴だ。前職を辞めた直後の落ち込んでいた時期も、新田は両親よりも親身に相談に乗ってくれて、ずいぶんと助けてもらった。

とりあえず生ビールで乾杯して、お互いの近況を伝えあった後、新田にカタベ製作所の面接結果について話した。

「それは残念だったな」

新田は、我が事のように悲しい表情を浮かべた。

「ようやく面接にまで進めたのに……」

「まあ、そんなにしょげるな。次があるさ」

「次かあ……」

「これまでに、何件エントリーしたんだ？」

「転職エージェント経由で二十五件、それとは別にネットで見つけた求人に五件」

「で、一次面接までたどり着けたのは？」

人差し指を一本立てると、新田の顔がわずかにひきつった。

「……まだ、全部結果が返ってきたわけじゃないけど」

とはいえ、九割以上の結果を受け取っている。

「そ、そうか……」新田は生ビールを一口飲んだ。「まっ、まだまだこれからさ。会社なんてごまんとあるからな」

励ましのつもりだろうが、俺はため息しか出なかった。考えれば考えるほど悔やまれる。もっと準備に時間をかけ、想定質問とその回答をちゃんと用意しておくべきだった。

逃した魚はあまりにも大きい。

『カタベ、カタベ、カタベ、カ、タ、ベ、製作所〜♪』

学生時代からひいきにしている昔ながらの居酒屋には、小さなテレビが設置されている。そこから、この国の人間ならほぼ全員が口ずさめる、カタベ製作所のコーマーシャルソングが流れてきた。テレビ画面へ視線を向けると、今や世界的ブランドとなった k a t a b e のロゴがでかでかと映し出されていた。

胃がキリキリと痛くなってきて、思わず腹をさすった。

「だから、そんなに落ち込むなって」

「でもな……」

「俺に言わせれば、あんなところに採用されなかった方が良かったさ」

「何言ってるんだ。一部上場の超優良企業だろ」

「それはそうだ。でもな……」新田はキャベツの山盛りを豪快にかぶりついた。「あそこは昔こそ、革新的な商品を連発していたけど、最近は技術力が落ちたつてもっぱらの噂だ」

「でも、スマホも産業向けの工作機械も、カタベ製がこの国じゃトップシェアなんだろう？」

「今のところはな。でもあそこの社長は、自社の技術開発よりも、業界のライアンスやら自治体とのパイプといった……要するに政治活動の方に熱心だからな」

「なるほど……」

面接での、プロジェクトマネージャーにこだわっていた若い人事担当の顔を思い出し、得心がいった。

「自社の技術を磨かない製造会社なんて、滅ぶことが約束

されたようなものだ」

と、少し顔が赤くなつてきた我が友人は強い口調で言った。新田は大学卒業直後、有名な製造系の大企業に入社したものの、本人曰く、『健全な製品開発を阻害するだけの複雑怪奇な社内力学』に嫌気がさして、三年足らずで退社。その後、いくつかの会社を転々とした後、数年前に一念発起、技術で生き抜くベンチャー企業を立ち上げた。大学時代から行動力の高い男だったが、社会に出て十年近く経ってもそれは健在のようだ。そんな彼と、どちらかと言えは行動する前に考え込んでしまうタイプの俺が、友人関係を続けてこられたのも不思議な話だ、と時々思うことがある。もつとも、俺にとつて新田は数少ない友人だが、新田にとつて俺は数いる友人の中の一人、なのかもしれないが。

「だからさ」残ったビールを一気に飲み干して、新田は続けた。「そんな沈みゆく船に今から乗るよりも、もつと凄いや会社が世の中にはいっぱいある。で、そんな会社に入つて、あいつらに自分を不採用にしたことを後悔させてやれば良いのさ」

友人の言葉にとても勇気づけられた。

不採用続きなのは、それを決めた人事担当に見る目がなかったからだ。それに、俺をリストラ対象にした前の会社の上層部も同じだ。俺のことをちゃんと理解してくれる会社が必ずどこかにあるはず……。

と、考えていたら、厚揚げを口に運ぼうとした新田と目が合った。

灯台下暗し。目の前に、俺のことを一番わかってくれる奴がいるではないか。

「なあ、新田」俺は改まった口調で言った。「お前のベンチャーに俺を入れてくれないか？」

新田は口を半開きにしたまま、箸を持つ手をぴたりと止めた。

「……た、高梨、何を突然言い出すんだ？」

「お前、自分の会社をどんどん大きくして、この国のものつくり現場を変えてやるつて、息巻いてたよな？」

「あつ、ああ……」

「俺も手伝わせてくれ。お前のことはよく知ってるから、きつと役に立てる」

新田は箸を置き、代わりにビールジョッキに手を伸ばしたが、もう空だということに気づいて、手を引つ込めた。それから、こちらの顔を見ると、ゆつくりと首を振つた。

「俺の会社は本当に小さいから、情けで人を雇えるほどの余裕はないんだ」

「情けつて！俺が役立たずだつて言いたいのか」

「落ち着け、高梨。そういうつもりじゃない。ただ、今の俺の会社の仕事と、お前の経歴じゃあ、ミスマッチが大きいって言いたいだけだ」

「確かに、俺はIT系で、新田は機械系。でも同じ理系だろ？ 何かの役には立つさ」

「そのわずかな違いが重要だったりするんだ。特に最先端の分野だと」新田はもう一度首を振ると、姿勢を正した。

「じゃあ逆に訊くが、高梨は俺の会社に何を提供してくれるんだ？」

「えっ？」

熱気が残る真夏の夜にもかかわらず、寒気を覚えた。これは昨日の面接の時にも感じたものだった。

「……まあ、それは。いろいろと……」

「いろいろじゃあ困るんだ。こっちも生活がかかっているからな。会社としては、新卒相手でもない限り、すぐに役立つ見返りを求めざるをえない。だから、俺のところまで働きたいって本気で言うのなら、一緒に仕事ができそうかどうかという具体的な情報欲しい。お前は何者で、これまでどういう経験をしてきたのか？」

そこに、いつもの気さくで友だち想いの新田信宏はなく、あるのは、町の片隅で闘う経営者の姿だった。

彼の強い目力に圧倒され、言葉が出なかった。

——自分は、何者なのだろうか？

重々しい空気が支配しかけた時、テレビから、再びカタベ製作所のコマージュソングが流れてきた。緊張感を打ち壊す、ずいぶんと軽い音楽だった。

新田の眉間から皺が消えた。彼はカウンターテーブルにいる居酒屋の主人に向かって、「生ビール二つ追加」と声をかけた。こちらへ振り返った時には、飲み会を始めた直後の柔らかな表情に戻っていた。

「悪い、難しく言いすぎたかもしれない。まっ、俺が言いたかったことは、もう少し履歴書を見返してみると良いっ

てことだ。そうすればお前に興味を持つ会社も増えていくさ」

これ以降、俺の転職が会話の俎上に登ることはなく、ひたすら他愛のない話をして、終電間近に店を出た。

3

お前は何者か、だって！ ちょっとベンチャーで社長をしているくらいで、何を偉そうに……。学生が囚われるような寒いことを言う歳でもないだろう。

と、終電に乗っている時は、説教じみたことを口にした新田に腹を立てていた。

自宅アパートに戻って、風呂にも入らずベッドへ直行し、翌日は正午前に目を覚まし、ちゃぶ台の前に座って昼のワイドショーを見ながら目覚まし用のコーヒーを飲んでいると、ふと、視界の隅に、転職攻略本で築かれた五重塔の頂上に安置された履歴書を捉えた。

手元に手繰り寄せ、広げる。カタベ製作所を申し込むときに下書きしたものだ。面接を思い出し、腹立たしい気持ちに蘇ってきた。特に俺より若いあの面接官だ。あいつ如きが見定められる器じゃないぞ、こっちは！ もっと年長者を敬え！

怒りに任せて、履歴書をくしゃくしゃにしてゴミ箱に叩きつけたくなったが、脳裏に昨日の新田の言葉が蘇った。「くそっ」

と吐き捨てながら、履歴書に目を通し始めた。

名前… 高梨 学（たかなし まなぶ）

性別… 男

年齢… 三十二歳

事実を書いたただけだ。特別字が汚いわけでもない。

写真

…死んだ魚みたいな目をしているな。印象も大切かもしれない。やはり街角にある自販式ではなくて、ちゃんとした写真屋で取り直した方がいいだろうか？

学歴・職歴

高校大学、そして、前職の会社名が書いてある。大学は悪くないランクで、会社だって、経営が傾くまでは毎年入社希望者が大勢集まる有力企業だった。難癖をつけられるような経歴だとは思わない。しかし、このままでは空白期間だけが増え、ますます転職が不利になってしまう……。

資格・免許

大学の時に取得した普通自動車免許と、前職で奨励金に

釣られて取得した情報処理技術者試験の名前が書いてある。特に後者は、合格率が二十パーセントを切るような高レベルなので、まずまずのアピールポイントになると思うのだが。面接官たちはそのことを理解していないのだろうか。だったら、本当に見る目がない。

志望理由

面接の時に話したこととほぼ同じ内容だ。特段変なことが書いてあるとは思えない。

趣味・特技… 読書、音楽鑑賞

いかにもありきたりだが、コンビニで漫画雑誌を立ち読みし、動画サイトでミュージックビデオを見ることはあるので、嘘ではない。でも昔はもう少し色々やっていたような気もする。どうしてこんなに無趣味になってしまったのだろうか。

というかそもそも、この欄、採用にどんな影響があるんだ？

ここまでが一枚。下にもう一枚あって、そちらは職務経歴書だ。これまでの業務内容を書くことで応募先のアピールになると転職エージェントから言われ、用意したものだ。そちらも目を通す。

入社後、社内基盤インフラ並びにデータセンターを管理する事業部へ配属。ネットワークやサーバー機器の導入やメンテナンス業務に従事。……以上。

ちゃぶ台の上に置いてあったスマホが震え始めた。転職エージェントからの電話だった。

通話ボタンを押した。「もしもし」

担当女性の高い声があった。「高梨さんですね、今お時間よろしいでしょうか？」

「はい」

『先日応募いただいた、トキワデベロップメントの件についてですが……』

「あっ、はい……」微かに残っていた眠気は吹っ飛び、身体中に緊張が走った。

『先方から連絡がありまして、今回は見送らせてほしいとのことです』

「そ、そうですか……」ぐったりと、二日酔いのように体が重くなるのを感じた。

『我々も力及ばず申し訳ありません』

と、お詫びの言葉が聞こえてきたが、まったく心が込もっていないように思えた。人間誰しも何十回と同じ事を言っていたら、そうなるだろう。

いつもならこの後、何か進展ありましたらまたご連絡いたします、と言われ通話が終了するところだが、担当者は

ためらいがちなく調で続けた。

『あのう、高梨さん。大変お伝え難いことなのですが……』

「なんでしょう？」

『このまま就職活動を、続けますか？』

「えっ、それはどういうことですか？」

『なんといいいますか』担当者は言葉を選ぶように、何度も間を明けながら言った。『書類選考で落ちたのが、これで二十三日目です。カタベ製作所の際は面接まで行けましたが、でも残念な結果に。このまま続けても、良い結果を得るのは難しいと考えています』

「そ、そんな……。俺は再就職できないって言いたいんですか？」

『い、いいえ』強く否定する声が聞こえた。『決してそのようなことは……。ただ、今の高梨さんの希望する条件ではいささか困難かと』

「どうしてですか？ カタベの面接へ行けたことは驚いていますが、基本的にこちらとしては前職と同じくらいの条件であれば十分だと考えています」

『それがなかなか難しくくて、ですね……。高梨さんくらいの年齢になりますと、企業側としては即戦力、つまり職務経験を重視します。ですが、高梨さんの職務経歴書では、アピールとしてはあまりに弱すぎます』

「そんなこと言われても……。ずっとこの仕事をしていたわけだから」

『何十億円の大プロジェクトを完遂させたとか、業界を震

據させる特許を取ったとか、そんな凄い内容である必要はなくて、チームを主導して業務の効率化を達成できた、みたいなほんの些細なことで良いんです。この人に仕事を任せたいって思わせるようなものが伝われば。特に、ご自身にリーダーシップがあるところをアピールできれば大きなプラスになります』

「それは、その……」

——また、リーダーシップか。

『とにかく』担当者と言った。『弊社の転職支援サイトも参考に、もっと職務経歴を掘り下げてみてください。必ずアピールできる点が見つかると思います。その上で、今後の活動方針を検討いたしましょう』

「わ、わかりました……」

通話が終了すると、スマホをベッドの上に投げつけた。

言いたいことを言ってくれる。こっちだって、書けるものなら最初から書いている。前職の業務内容は、朝から晩まで門外不出の虎の巻マニュアルに従って、機器の点検、保守、そしてまた点検……。単調ではあるが、一歩間違えれば何十、何百万人もの利用者が被害を受けるから、課せられた責任は重大だ。初心者が簡単に務まるような仕事ではない。多くの経験と努力と忍耐によって初めて成し遂げることができ、職人のような世界で、辛くはあったが、それなりのやりがいと誇りを感じることもあった。

しかし、それを職務経歴書に書こうとすると、途端に手が止まってしまふ。マニュアルの事細かな注意点なんて書

けるわけがないし、特に前職では、課長以上に出世しない限りはリーダーシップを求められるような仕事は回ってこない。そして課長昇進の平均年齢は四十代中頃だ。

しかし、一步世間に出れば、この歳で前職程度の待遇を希望するなら、リーダーやプロジェクトマネージャーの経験が求められてしまう。さもなければ、年齢不問未経験者ウエルカムなブラック企業か、不安定な派遣社員やフリーターしか道は残されていない。

今でこそ、気楽な独り身生活だが、やはりいつかは結婚して、家族と暮らしたいという淡い願望は持っている。だがこれではその夢も風前の灯。未来は、なんの楽しみもない、死なず生きずの最低カロリー生活が待っているだけ。

——これでもしかして、人生詰んだんじゃない？

そう思った瞬間、目の前が真っ暗になった。子どもの頃から必死に勉強して、多額の学費ローンを組んで大学を卒業し、目の前の仕事を着実にこなしてきたはずなのに、行き着く先は奈落の底。何この極悪トラップ！

——どうしてこうなった？

俺が悪いのか？ 何かの非道な行いに対して、神様からの罰を受けたのか？

いいや、違う。俺はただ、これまで真面目に生きてきただけだ。人畜無害で、誰かから非難され、良心を穢すようなことからは無縁だった。

悪いのは、前の会社を存亡の危機に追いやった連中、俺を人員整理対象にした上司、それに、三十歳を超えたらり

ーダーやプロマネ経験があつて当然だと勝手な常識を掲げ、それ以外を排除しようとする、この世間だ。

——こんな社会なんて、いつそのこと、滅んでしまえば良いのに。

ぐるるっ、と盛大に腹の虫が鳴った。憤怒に駆られるあまり、食事のことをすっかり忘れていた。

ここで悶々としていてもしょうがない。気分を変えようと、外で昼食を取ることにした。

そこで、あの求人票を見つけたのだ。

4

翌日の夕方、一通のメールが来た。秘密結社サマードリームからだった。

しかし、このメールを見た瞬間、なんだこれは？ と首を傾げた。一日経過したことで心も落ち着き、世界に対する呪詛などすっかり頭の中から消え去っていたのだ。

冷静になると、新田や転職エージェントが言う通り、一度自分を見つめ直す必要があるだろう、と考えるようになっていた。だから今日は一日、通販サイトのレビューを参考に、今の自分に相応しそうな自己啓発本を探したり、新しい自分を発見できると喧伝するオンラインサロンの評判を調査したりしていた。そこに秘密結社からの連絡だ。驚かすにはいられない。

メールの内容は、書類選考を通過したので早速明日面接

をしたい、というものだった。面接会場の住所も記されている。

あの求人票、誰かのいたずらではなかったようだ。

それともまだ、いたずらの途中かもしれない。面接会場にホイホイとやってきた応募者を隠しカメラで撮影して、別室でその様子を見ながらゲラゲラと笑う、アロハシャツを着たテレビディレクターの姿が脳裏に浮かんだ。

さて、行くべきか行かざるべきか、それが問題だ。

普通に考えれば、行かないの一択だ。万が一いたずらでないとしても、そこで待っているのがまともな連中だとはとても思えない。何せ、世界滅亡なんて考えているのだ。行つたが最後、非人道的な改造手術によって、異形の怪人にさせられてしまうかもしれない。

秘密結社からのメールを削除しようとしたその時、スマホが震え始めた。

知らない番号からの電話だった。基本、こういう時は居留守を使う。何かの勧誘だったら面倒くさいし、相手がどうしても伝えたいことがあるれば、留守電に残すだろう。その時は折り返して電話すればいい。

まもなく、スマホの振動は止まり、留守電が残されたという通知が現れた。

確認すると、女性の声流れ始めた。

『こちら、高梨学さんのお電話でしょうか。私、秘密結社サマードリームの総帥秘書しております、坂上と申します。この度は、採用面接に応募いただきましてまことにあ

りがとうございます。先ほど面接の案内メールを送らせていただいたのですが、ご確認いただけただでしょうか。急のことで申し訳ありませんが、明日の面接、お待ちしております。わからないことがあればメールかこの電話にお願いいたします。それでは失礼いたします」

メッセージをどうしますか？ と訊ねる機械音が聞こえ、もう一度再生を選んだ。坂上と名乗った女性の優しく落ちて着きのある、聞いている者の心を穏やかにさせる声が再び流れだした。

再生後、メッセージを保存し、メールも削除せず、代わりに重要マークを付与した。

たとえいたずらだとしても、この声の持ち主に会えるだけでも、行く価値はある！

5

メールにあった住所は、最寄り駅から歩いて十分ほどにある雑居ビルだった。一階は全国展開するコーヒード、二階は理髪店、三階は空室で、そして四階が目的の場所だ。さすがに看板は出ていなかった。

エレベーターに乗る。空調が効いておらず、とても蒸し暑かった。四階に到着すると、目の前には塗装の剥げた鉄製の扉が一つあるだけだった。

こんな古い建物の中に、本当に世界の滅亡を企む秘密結社なんてあるのだろうか？ いたずら説がますます現実味

を帯びてくる。あの麗しき昨日の留守電の声こそ、ネギを背負ったカモを釣り出す仕掛けかもしれない。扉の先には、厳ついおじさんたちが居並び、その陰には、他人をコケにして再生数を稼ごうとする、薄汚い似非ユーチューバーが潜んでいるのでは？

声の主には会いたいのが、笑いのタネにされるのは嫌だ。さてどうやって立ち回ろうかと思索しているとき、突然、入り口の扉が開いた。そして中から現れたのが、真夏にもかかわらず、薄ピンク色のパンツスーツをきつちりと着こなした黒髪の女性だった。

「あっ、その……」

不意を突かれて、しどろもどろしていると、女性は丸メガネの奥にある、キラキラと輝いた瞳を大きくして、こりと明るい笑顔を浮かべた。

「もしかして、高梨さんですか？」

「え、ええ……」

「秘書の坂上千智です。本日はお忙しい中、ご足労いただきありがとうございます」

「は、はい……、あの、そのう……」

鉄のように硬くなった頬のせいで、ちゃんと声が出せなかった。

彼女が昨日の留守電の主のようだ。年齢は二十代後半だろうか、想像していたよりも若く、一目見た瞬間から心は激しく高鳴っていた。つまり、俺の好みのストライクゾーンど真ん中だった。来て良かった！

「こちらへお願いいたします」

俺の下心などまったく気づかぬ様子で、千智さんは案内を始めた。

彼女の後に続いて室内に入り、また驚いた。狭い廊下に本や雑誌があちこちで山脈を形成し、何に使うかさっぱりわからない機械類や、金属片が土石流に襲われた直後のように散乱していた。足の踏み場もない。こちらは何度も足を取られて転びそうになったが、前に行く千智さんのパンブスは、ヒールがかなり高いにもかかわらず、慣れた足取りで難なく進んでいく。この機械密林空間を一日や二日で形成できるとは思えない。いたずら目的で急ごしらえしたわけではない。ただ、アジトというよりは産廃処理場といった方がピンとくるが。

秘密結社が本当だとすると、このような得体の知れない空間に、常識的な格好の千智さんがいるという状況には違和感しかない。テレビや漫画に出てくる秘密結社の女幹部といえ、サディスト的嗜好を持っていて露出度高めの服を……、

「高梨さん」

「はっ、はい！」

急に名前を呼ばれて、声が裏返ってしまった。

「どうかしましたか？」

「い、いえ別に」

首を大きく左右に振って、アブナイ妄想を頭から振り払

った。

「ではこれから、総帥との面接を行っていただきます」

「いきなりですか。総帥って……、結社の一番偉い人ですよね」

「たいていの入社面接は、複数回あって、回を重ねるごとにだんだんと面接官が偉くなってくるものだ。」

「そうです」千智さんはこくりと頷いた。「でも、なんでもかんでも自分でやらないと気が済まない方なので」

「なるほど」

「どうやら、ワンマン社長型のような。前職の課長にそっくりだ。」

千智さんは、『総帥室』と書かれた扉を開ける。そちらも前室同様、本や機械で溢れかえっていたが、人の姿は見えなかった。

「あれ……？」千智さんは総帥室をきよろきよろと見回した。「どこ行つたの、おじいちゃん」

耳を疑った。「お、おじいちゃん？」

本の断崖絶壁の奥から、男の声が聞こえてきた。

「おお、こつちじゃ。ちよつと手を貸してもらえんか」

千智さんは声が出た方へ歩いていった。ごそごそと何やら物音がした後、本の壁の影から老人を乗せた車椅子が現れた。頭部にわずかに白髪が残るだけの白衣の老人は、腹が大きく突き出たかなりの肥満体型で、最初に脳裏に浮かんだのは、セイウチだった。

「ふう、助かった。資料を探しておいたら、突然本が崩れ

出してな。危うく窒息死するところじゃったわ」

「だから整理してって、いつも言ってるでしょ」

車椅子を押す千智さんの姿も現れた。

「今のこの状態こそが完璧なのじゃ。どこに何があるのか、目を瞑っていてもわかるからな」

「だったら、遭難なんてしないでしょ、おじいちゃん」

「まったく、うるさい奴じゃ、最近ますます直子に似てきたな……。で、わしになんの用じゃ？」

「面接の方が来たよ、……あつ！」

一斉にこちらに振り向いた二人と目が合った。

話の内容から推察するに、どうやらここは、一族経営の秘密結社のようなのだ。

こちらが軽く会釈をすると、千智さんは恥ずかしそうに顔を赤らめた。……可愛い！

一方、この秘密結社の総帥らしき老人は、俺に向かって車椅子を前進させた。

「ふむふむ、なるほど。君が、わしの秘密結社に入りたいという若者かね。履歴書の写真よりも目が死んでおるな」

随分と失礼な総帥だ。しかし、彼の老人のものとは思えない、精気に溢れた鋭い眼光と比べられたら、反論できそうになかった。

「た……高梨学です。よろしくお願ひいたします」

「正義じゃ。正義の正に、正義の義と書く。よろしくな」

とても、世界の滅亡を画策する秘密結社の長の名前とは思えない。

「よ、よろしくお願ひします……」

「うむ。千智、茶を入れてきてくれ。高梨くんはそこに座りたまえ」

総帥が指差す先に、金属片の山に埋もれたソファァーが辛うじて見えた。どかしたら怒られそうだ。一番平らな部分に尻を預けたが、スーツに穴が開かないかと不安になった。

災害直後のような悪路にもかかわらず、総帥は器用に車椅子を操作して、ソファァーの前に移動してきた。

「早速だが、高梨くん。この部屋を見て君はどう思う？」

「はい？」

いきなりの謎めいた質問に面食らったが、ここは相手が気に入りそうな事を答えるべきだろう。

「ええつと……、大変整理されているかと」

総帥は不機嫌そうに鼻を鳴らした。「節穴め。誰がどう見ても、機械や金属片や本が散乱しているだけじゃろ」

えっ、どうして？ さっき自分の中では整理整頓できているって言ってたよね！

「人の話を無批判に信じてても、ロクなことにならないぞ」総帥は近くに落ちていた機械部品を持ち上げた。「ここは無秩序に散らかった部屋じゃ。しかし、そこから法則性を見出すのが科学。法則を利用して新しい世界を築き上げるのが技術。そして技術と社会を組み合わせるのがイノベーション。つまりこの部屋には、人間の知的営みが凝縮されておるのじゃ」

面接が始まって早々、訳のわからないことを聞かされて

頭が痛くなってきた。これ以上症状がひどくなる前に帰った方が良くないかと思つた矢先、千智さんが麦茶を持って戻ってきた。

「ちよつと、おじいちゃん。またいきなり人を煙に巻くよ
うなこと言つたんでしょ。せつかく面接に来てくれたのに、
高梨さんが目を回してるよ」

「おつと、すまん、すまん。ついつい癖で……」

「高梨さん、どうぞ」千智さんが麦茶を差し出してきて。

「さっきのおじいちゃん……、ごほん、総帥の話は忘れて下さい。久しぶりに他人と話せて興奮してるんですよ」

「はあ」

もう総帥じゃなくておじいちゃんでもいいだろ、と思いつながら、麦茶を受け取つた。

「まあ、アイスブレイクはこれくらいにしておこうか」

と言つて、正義さんはぐいっと麦茶を飲み干した。こちらとしては、余計に体の緊張が高まつたのだが。

「では高梨くん。単刀直入に訊こう。君はこの世界が滅べばいいと思つているのか？」

あまりに直球で、思わず、ゴクリと唾を飲み込んでしまった。

しかし、当然訊かれる質問だ。

電話の主……千智さん目当てで来ただけです。と正直に答えるわけにはいかない。

俺は黙つてうなずいた。

しかし、正義さんは首を左右に振つた。「それではだめ

だ。君の言葉で聞きたい」

「……」

ごまかしは許してくれないようだ。

大きく深呼吸をして、俺は口を開いた。

「……世界は、滅べばいいと思います」

その瞬間、何か重たいものに体を拘束されたような感覚に襲われた。……もちろん錯覚だ。だが、さっきの言葉は本当に言つて良かったのだろうか、と少し不安になった。

正義さんはしばらくの間、じつと睨むような視線を向けていたが、やがて、こくこくと二、三度頷いた。

「……よし、合格だ」

「えっ？ 合格？」

思わず鸚鵡返しすると、正義さんは眉根をひそめた。

「いちいち訊き返すな、煩わしい。わしは君をこの秘密結社に受け入れる、と言つたんだ」

「たつたそれだけの質問で決めるんですか？ もつと色々訊くことがあるんじゃないですか？ 前職の話とか？」

「わしはそんなものに興味ない。君の意思、それだけを確認したかつたのじゃ」

「で、でも。俺……、この歳でリーダーもプロマネも経験したことはないんですよ。即戦力になれるかどうか……」

正義さんは鼻で笑つた。「ゼネラリストの盲信者どもめ。君がこれまでどんな人生を送つて、経験を積んできたとしても、それはかけがえのない君だけのものだ。リーダー経験がなからうと、どれだけコミュニケーションで関係ない。

それを活かせる道が必ず存在する。だから、もつと堂々としたまえ！」

強烈な突風を受けたかのような衝撃だった。転職活動をする中で、心の中で積もり続けていた埃のような何かが、全部吹き飛んでいったような気がした。

——履歴書を否定され続けた俺にも、存在意義があるのか？

千智さんの明るい声が聞こえてきた。

「高梨さん。力を合わせて世界を滅亡させましょう」

6

本当に内示を受けるなら改めて連絡してほしい、と言われ、秘密結社の面接は終了した。

その日の夜はなかなか寝つかなかった。この高揚した気持ちには久方ぶりだった。小学校の時に、とても難しいテストを一人だけ百点を取って、教師や親たちに褒められた時以来かもしれない。

しかし、その興奮も、朝を迎える頃にはすっかり醒めていた。

少し心地良い言葉をかけられたくらいで、すぐに有頂天になるなんて脳内お花畑もいいところだ。また千智さんに会いたいのには山々だけど、どれだけ言い繕っても、彼らがやろうとしていることは世界の滅亡。犯罪だ。それに手を貸すなんてどうかしている。

ということ、心を入れ替えた俺は、しっかりと朝食を食べた後、自己啓発本を探しに駅前の古本屋へ行こうとアパートを出た。すると直後に、転職エージェントから電話がかかってきた。

『高梨さん。いまちよつとお時間よろしいでしょうか？』

「はい……」

担当者の声のトーンから、その先の話が想像できてしまった。

『実は、応募いただいております残りの会社なのですが、いずれも書類選考を通過することができませんでした。こちらとしてもお力になれず申し訳ありません』

「そうですか……」

体が底なし沼の中へ引っ張られるような感覚がした。

『それで、ですね。今後の方針を相談させていただきたいのですが、職務経歴書の修正の方はどうなっておりますでしょうか？』

「えっと、その……、今、書き直しているところです」

『わかりました。では、それが出来次第、新しい会社を紹介するという流れでよろしいでしょうか？』

「はい……」

『それでは、引き続きよろしくお願いたします』

通話が切れた後も、しばらくその場から動けなかった。

——この世界に、俺の居場所はあるのだろうか？

古本屋へ行くのはやめて、部屋に戻った。腹の中を蠢く嫌な感覚を追い払いたくて、まだ真っ昼間にもかかわらず、

二 秘密結社

1

冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、一気に飲み干した。しかし、苦いだけで、美味しくもなければ、爽快感もない。人生は手詰まり。この世界に俺の生きる余地など残されてはいない。だったらもう、どうにでもなってしまうえ！

スマホを手に取り、千智さんの番号に電話をかけた。

彼女はすぐに出た。

『はい、坂上です』

雲一つない晴天のように、爽やかな声だった。

「あのう、昨日面接にお伺いした、高梨ですが……」

『ああ、高梨さん！ 昨日はありがとうございます。もしかして、内示の件ですか？』

「はい。御社の内示を、受諾いたします」

翌日、半年振りに生き地獄のような満員電車を体験し（懐かしさはまったくなかった）、九時ちょうどに、面接で訪れた雑居ビルに到着した。

新しい会社。こんな緊張は久しく感じたことはなかった。もちろん前職では緊張の連続だった。ささいのミスが何十万ものユーザに迷惑をかけ、人事査定にも響くかと考えると、毎日が胃腸を疲労させる極限状態だった。しかし、今は同じ緊張でも、どことなく心地良さをすら感じていた。

四階の秘密結社の事務所……ではなくてアジトの入口、塗装の剥げた鉄扉をノックして中へ入る。面接の時と同じく、本と機械の密林地帯だった。

「おはようございます。高梨です。今日からよろしくお願ひいたします」

声を張り上げると、ややあって、奥から「はい」と千智さんの声が聞こえてきた。これが聞けただけで、今日一日の幸福は約束されたも同然だ。

「おはようございます、高梨さん」

千智さんが姿を現した。今日は白のブラウスに薄水色のタイトスカートで、彼女の爽やかな印象がグッと引き立っていた。

「今日から、よろしくお願ひいたします」

「どうぞ、こちらへ」

千智さんに連れられて、アジトの奥へ進んだ。

「面接に来た時もあったんですけど、すごい本と機械の数ですね」

「おじい……すみません、総帥の趣味なんです。昔から、ちよつと変わったガジェットを作るのが好きでして。……例えばこういうのですが」

千智さんは床に散らばった金属片の中から、延長コードを引っ張り出した。自宅アパートにもある、至って普通のコードに見えた。

「これを、こうすると……」

千智さんが延長コードを触っていると、突然、プラグ側の手で持つところから四本の足が生えたではないか！ 四本足のプラグは千智さんの手から離れて歩き出し、壁にあったコンセント口に自ら挿さった。

「なんですか、これ……」

「総帥曰く、自立歩行型電源コードだそうです」

何の捻りもない名前だが、意味不明感は十分に伝わってきた。

「これだけ事務所がごちゃごちゃしていると、コンセントの位置を探すのも大変ですから、総帥が作ったんです。他にも自動でUSBポートに挿さる、自立歩行型USBメモリだとか、部屋の温度が上がると踊り出す扇風機だとか、暇があればいろいろ作ってるんです」

「はあ……」 工作好きの老人。秘密結社の総帥のイメージ

からはほど遠い。「じゃあ、正義総帥は昔、エンジニアの仕事でもされていたんですか？」

「いいえ。今もです」

「今？」

訊き返そうとしたが、千智さんが話を遮ってしまった。

「ここが、高梨さんのお部屋です」

千智さんが立ち止まった先にある扉を見ると、真新しい字で『幹部室』と書かれていた。

おおっ、個室持ち！ さすがは幹部候補待遇！ テンションが一気に上がってきた。

「入ってもいいですか？」

「どうぞ」

期待に胸を膨らませて幹部室へ足を踏み入れた。広さは六畳ほどで、真ん中に大きな執務机と、いかにも重役が腰掛けていそうな皮張りの肉厚チェア。壁側にある本棚にはぎっしりと新旧様々な本や雑誌が並んでいたが、他の部屋のように機械や金属片の山は存在しなかった。

「昨日、急いで片付けたので、まだ荷物が残っていますが、ご自由に使ってください」

「いいんですか、本当に？」

「ええ、もちろん。十時から総帥室で入社式を行いますので、時間になったら来てください。あとそれまでに、これに目を通してサインをお願いします」

千智さんはバインダーで閉じられた紙を俺に渡すと、幹部室を出ていった。

一人になり、早速重役チェアに座ってみた。腰と背中が優しく包み込まれ、いつまでも座っていたいと思わせてくれる。

広い仕事部屋に座り心地満点の椅子！ 夢のようだ。前職では、座るとすぐに尻が痛くなる硬い椅子に座らされ、隣の同僚と肩をぶつけ合うほどの密度の中で働いていたが、なんという差だろう。幹部万歳！ 秘密結社万歳！

ふと、思いついて、椅子に深く腰掛け、靴を履いたまま両足を机の上に置いた。おおっ、まさにテレビドラマで出てくる悪徳重役そのものじゃないか。ここに葉巻があれば完璧だ。背徳感でゾクゾクと背筋が震えた。

そのままの姿勢で、千智さんから渡された書類へ目を向けた。一枚目が秘密保持誓約書。業務内で知った機密情報はもちろん、会社名すら外部に漏らしてはいけない、とあった。秘密結社なのだから、これは当然だろう。ただ、求人広告に出している時点で実効性の程は甚だ疑問だが。

二枚目は給与体系に関する覚書。基本給は求人票にあった通りだが、インセンティブ制度の計算式を見て、目を見張った。平均的な評価でも基本給を軽く超え、より良い評価が得られれば、アメリカ西海岸で働くハイスペックITエンジニアも驚くような額に達する。

「すごいな、これ……」

まずまず、この秘密結社のがわからなくなっていく。これだけの給与を支払える能力があるなら、雑居ビルじゃなくて自社ビルの一つや二つ建てられるんじゃないだろう

か。まあ、世界滅亡とか言っているくらいだから、ここは数ある拠点の一つで、世界中に支部があるのだろう。

もちろん、両方の書類にサインをした。

——これって、もしかして、逆転人生！

2

十時になり、総帥室へ向かうと、すでに総帥と秘書がいた。

面接同様、尻の置き場もないソファーに座らされると、所々黄ばんだ白衣を着て車椅子に乗った正義総帥が軽く咳払いをした。

「改めて自己紹介をしよう、わしが秘密結社サマードリーの総帥、正義じゃ。で、隣におるのが、わしの孫にして秘書を勤めてくれておる、千智じゃ」

「よろしくお願いいたします」千智さんが丁寧に頭を下げた。

「高梨学です。こちらこそよろしくお願いいたします」二人に向かつてお辞儀を返した。

「よくぞ秘密結社への入社を決意してくれた。大いに歓迎しよう。共に世界滅亡のシンフォニーを奏でようぞ」

総帥は、演奏開始の合図を送る指揮者よろしく、両手を高く上げた。

「あのおう、それについて一ついいでしょうか？」

「なんだ、言ってみよ。高梨幹部候補生」

幹部候補！……良い響きだ。

「世界滅亡って、具体的にどういうことでしょうか？」

本当は面接の時に訊くべき最も根本的な疑問だったが、すぐには受け入れ難い展開が続いて、うやむやになっていった。仕事を始める今こそ、はっきりさせるべきだろう。

「……もしかして、俺を尖兵として筋肉ムキムキの怪人に改造するとか？」

「何、訳のわからぬ事を言っておるのだ。筋肉が欲しければスポーツジムへ行つてプロテインでも飲むがいい」

どうやら、そういう類の秘密結社ではないらしい。安心した。

「じゃあ、どうやって世界を滅亡させるんです？」

「実に良い質問だ」正義総帥はいかにも悪役にふさわしい不敵な笑みを浮かべた。「当然の疑問であろう。だが今はまだ教えられぬ。高梨くんはまだ幹部候補生で研修期間だ。晴れて正式な社員と認められた時、改めて教えることになる。それまではわしに腹案あり、とだけ言っておく」

秘密結社の根幹を成すトップシークレットというわけだ。それなら、新参者に簡単には教えてくれないのも納得だ。

「じゃあ、俺はここで何をすれば良いんでしょう？」

「しばらくは千智の指示に従ってくれたまえ」

「その件は、入社式が終わった後で詳しくお話しいたします」と、千智さん。

秘書の指示に従う幹部、というのなかなか理解に苦しむ構図だが、秘書の言葉は総帥の言葉だと思えば、そうい

うものかもしれない。

「この際だ。他に高梨くんが感じている疑問があれば、訊いておこう」

「じゃあ、お言葉に甘えて。この秘密結社の規模ってどれくらいなんですか？」

それまで自信たっぷりに堂々と語っていた総帥は、初めて悩ましげな表情を浮かべた。「ふむ、求人広告を出してはいるんじやが……」

正義総帥の言葉を千智さんが引き取った。「稀に履歴書は届くんですが、面接を打診しても連絡が取れなくなったり、面接に来てくれても、内定を辞退されたりするんです」「何が悪いのかのう。広告費をもっとかけたほうがいいのか……」

総帥と秘書、二人揃って首を傾げた。

「はあ」

聡明に見える千智さんでも気づかないのか、それとも正義総帥に合わせるだけなのか。こちらにしてみれば、応募者の反応は不思議でもなんでもない。事実、俺自身も同じ行動を取ろうとしたし。だがこの話を馬鹿にした連中も、得られたはずの待遇を見たら臍を噛むに違いない。

……って、訊きたかったのはそういうことじゃない。

「あのう、今の結社の規模を教えてくださいませんか？」

「ああ、そういうことか。わしが総帥、千智が秘書。そして高梨くん、君が幹部じゃ」

「……えっ？ もしかして」

「はい、これで全員です」と、真面目な顔で千智さんは言った。

思考が正常に戻るまでしばらく時間がかかった。たった三人！ しかもそのうち二人は祖父と孫娘。後継者問題に頭を抱える家族経営の町工場レベルの規模で、世界滅亡だって！ そんなことできるわけがない。

薄々感じてはいたが、今、確信した。全てはこの老人の妄想であると。そして千智さんは祖父を満足させようと、健気にもその妄想に付き合っただけだ。なんて優しい子だろう！

待っていてください、千智さん。俺があなたをこの妄言の密林から救って差し上げます。

「どうした、急に黙り込んで？ もう質問はないのか？ ではそろそろ、わしは失礼させてもらうよ。新しい発明で忙しいからな」

「最後にもう一つだけ。そもそも総帥はどうして世界を滅ぼそうと思ったんですか？」

突然、千智さんが俺に向かって何かを否定するかのようになり、顔を小刻みに振り始めた。その直後、硬い物が地面に叩きつけられたような、激しい音が聞こえてきた。驚いて、音がした方へ目を向けると、金属タワーの一つが倒壊していた。正義総帥が張り倒したのだ。彼の目は三日月のように吊り上がっていて、顔も茹で蛸のように真っ赤になっていた。

俺は何かやらかしてしまったのだろうか、と思った次の瞬間、総帥の口から、「フーッ」と猛獣の唸り声のような音がして、続いて、地の底から響くような低い声が出た。

「復讐じゃよ。わしらをコケにした連中へのな」

3

そのまま、入社式は終了してしまった。獣のように唸り続ける正義総帥を乗せた車椅子を押して、千智さんは総帥室を出ていった。手持ち無沙汰になった俺も幹部室へ戻った。

特に何もすることがないからスマホでネットサーフィンしていると、千智さんが入ってきた。表情が硬い。怒っているのかもしれない。でも、その顔ですら素敵に見えるのだから不思議だ。

「高梨さん。最後の質問、あれは禁句です」

「どうしてですか？」

正義総帥の豹変には、たしかに驚いたが、大それた計画について、それがどんなにつまらない理由だとしても、実行する動機を知りたいと思うのが人情だろう。

「どうしてもです」千智さんは強い口調で言った。「あの話を蒸し返されると、おじいちゃんしばらくの間正気ではいられなくなるんです」

「よほど大きなトラウマを受けたんですか？ そして、世界滅亡を画策し始めた、と」

「そうです……」千智さんの顔に陰がさした。

「世界滅亡は、正義さんの妄想じゃないんですか？」

入社式で抱いた疑問を口にした。すると千智さんは喫驚の声を上げた。

「妄想！ とんでもない、おじいちゃんは大真面目に計画を練り、着実に準備を進めてきたんですよ、それを妄想だつて言うんですか！」

「決してそんなつもりは……」

「高梨さんも、世界滅亡を夢見て、この結社に入ったんですよね？」

「ま、まあ……」

「だったら、総帥のことを信じてください。そうでないと、どんな素晴らしい計画も台無しになってしまいますから」

本当に祖父のことを信じているのか、それとも祖父の妄想に健気に付き合っているだけなのか、彼女の態度からは計りかねた。

「……わかりました、信じます」

と、結局答えた。総帥の世界滅亡は妄言だと確信していたが、千智さんのためなら、従っても良いと思った。それに、この地位と報酬を捨てるのは惜しい。

「ありがとうございます。改めまして、よろしくお願いいたします」千智さんは深々と頭を下げてきた。

「よしてください。俺も仕事としてやりますから。それで、これから何をすれば？」

「そうですね。そちらが本題です」千智さんは一枚の名刺

を差し出してきた。「早速で申し訳ないんですが、午後からそこへ行っていただけませんか？」

渡された名刺を、思わず二度見してしまった。

「……本当に、ここですか？」

「ええ、お願いします」

「これって、世界滅亡と関係があるんです？」

「もちろん」

千智さんははつきりと答えた。

そして、午後……。

「みなさん。ちょっといいですか。本日より我々と一緒に働くことになった高梨さんです」

「高梨学です、よろしく願っています」

五人ほどいるスーツ姿の男女が、こちらへ向かって力強い拍手を送ってきた。全員知らない顔だ。しかし、すぐ隣に立つ、俺を紹介した男。彼だけは見覚えがあった。

前職の上長、岩村課長だ。

俺は、派遣社員として古巣に戻ってきたのだった。

4

「なるほど、こりゃ、傑作だ」

ジョッキに入った生ビールを全部ぶちまけてしまおうくらい、新田は腹を抱えて大笑いした。

「……笑い事じゃない」

新田を睨みつけたまま、枝豆を口に放り込んだ。

秘密結社で働き始めて二週間後、新田から電話があり、ようやく転職先が決まったと伝えらるると、じゃあ祝杯だ、ということになり、この週末、いつもの居酒屋に集まった。派遣として再び前の職場、前の課長のもとで働き始めたことを伝えたら、新田が大爆笑したというわけだ。

「悪い、悪い」ようやく笑い止んだ新田だったが、まだ息苦しうに大きく肩を上₂下₃させていた。「でも、入社初日にいきなり派遣で、前の会社に行かされるなんてことあるんだな」

「こっちも、びっくりだ……」

表向きは世界滅亡を画策する秘密結社を装い、裏では派遣業を営んでいたなんて、まったく予想できなかった。ちなみに、転職先の表の顔のことまでは新田に伝えていない。秘密保持誓約で禁止されているからなのだけど、そんなものがなくとも、世界滅亡を社是とする会社に就職したなんて口によれば、馬鹿にされるか、精神を疑われるだろう。

「でも、良かったんじゃないか」新田はテーブルにこぼれたビールを拭きながら言った。「勝手知ったる古巣に戻ってこられたんだから。前の仕事が嫌いだった訳じゃないんだろ」

「まあな……」

「あまり嬉しそじゃないな。何かあったのか？」

「古巣って言いたいところだけど、仕事内容と課長以外はまったく別物になっていた」

「と、言うത്？」

「まず会社名が変わった。瀕死の状態にあった前の会社のインフラ部門を、カタバ製作所の系列会社を買収して、今じゃその会社の一部門って扱いだ」

「ってことは、念願のカタバ社員になったのか？」

「茶化すな、俺はあくまで派遣だ。でも、そこが大きく変わったところで、課長以外の正社員が全員いなくなつた。前は正社員を中心に業務を回していたのに、買収を期に社員の大半を整理して、派遣中心にしたんだと。俺以外の今いるメンバーも全員別のところから派遣されてきたらしい」

「あーあ、嫌だねえ」新田は悲しそうに首を振った。「エンジニアを人件費でしか考えられない悪しき風習だ。それじゃあ、知識やスキルがちつとも蓄積されていかないだろうデジタルトランスフォーメーションとやらも名ばかり、技術立国としてのこの国はますます衰退していく」

「派遣先は、開発じゃなくて、保守がメインなんだけどな」

「同じことさ、全部つながっているんだよ」

「さすがはベンチャー企業の社長殿。俺とは意識の高さが違いますな」

「そっちこそ茶化すな、俺は事実を言つたまでだ」

本当にそれが事実かどうか、判断できる材料を俺は持っていない。だが、新田は、その信念を貫こうとベンチャーを立ち上げた。彼の会社は、新しいことに挑戦したいが様々なしがらみによってそれが難しい大企業と、技術力は高いが知名度の低い町工場を結びつけ、革新的な製品を作

り上げることがミッションとしている。仕事はなかなか大変らしいが、彼の生き生きとした顔を見るかぎり、やりがいのある仕事ではあるようだ。

『カタベ、カタベ、カタベ、カ、タ、ベ、・製作所♪』
付けっぱなしのテレビから、いつもの聴き慣れたコマーシャルソングが流れてきた。最近、特に耳にするようになった気がする。

コマーシャルが終わると、ニュースキャスターの顔が映された。

『では、続いているニュースです。本日夕方、文部科学省はカタベ製作所と共同で記者会見を行い、二週間後に迫った、宇宙加速器実験衛星の打ち上げについて、計画が順調に進んでいることを発表しました』

「おっ」新田がテレビへ視線を向けた。「いよいよか……」
「何がだ？」

「宇宙加速器実験だよ。SNSでもかなり話題になっているけど、お前知らないのか？」

首を左右に振った。「つい最近まで、SNS見ているよな気分じゃなかったから」

「それもそうか。素粒子加速器の実験って知ってるよな。ほら、スイスにあるLHCとか」

「名前くらいは。確か、原子かなにかを高速で衝突させて、更に小さな粒子を見つけてやつだろ。えっと、ヒッグス粒子とか……なんの意味があるかは知らないけど」

「人類の飽くなき探究心だ。もちろん工学的な意義もある。

で、その粒子加速器を宇宙に作るうって計画があるんだ」
「どうして？」

「地上で作るよりもずっと大きな円周の加速器が作れるんだ。すると、より強力なエネルギーを扱えるようになって、素粒子の探索が進むっていう発想さ。真空の宇宙空間に電磁場を調整できる複数の衛星をリング状に並べて、それらを加速器として使うんだが、いよいよ最後の一機が打ち上がるのさ」

「なるほど……」

俺が再就職のことで悶々としている間に、世界は随分と先に進んでしまったようだ。一人だけ取り残されてしまったような気分だ。

「それで、加速実験衛星の製造と運用管理をカタベ製作所が担っているんだ、ほら……」

新田がテレビを指差す。そこには光沢感のある高級なスーツを着た五十代くらいの男の姿が映っていた。

「あの男が、カタベ製作所の二代目社長さ」
社長はカメラ視線で、『準備は至って順調です。必ず打ち上げを成功させ、我が国の科学技術力の高さを世界に証明したいと思います』とコメントしていた。

「技術力の高さね。よくもまあ、その口で言えるもんだ」
新田にしては珍しい、他人を蔑むような口調だった。た

しか、前の飲み会でも、彼はカタベの技術力の低下を批判していた。

「あいつが社長になってから、製品のリコールが増えてい

るからな。それでも大きな問題にならないのは、政治力に物言わせているからさ。カタベの製品に魅力がなくなつたのは全部あのボンクラ二代目社長のせいだ。先代社長とは大違いさ。あの人は本当に凄かった。技術の力で、小さな町工場から大企業にまで育て上げたんだからな。二代目は先代の栄光に、おんぶにだっこしているだけだ」

新田はカタベの先代社長に対して、強い憧れを持っているようだ。彼のサクセスストーリーに、自身の野望を重ねているのかもしれない。

衛星関連のニュースが終わり、近所の名店特集が始まつた。

「俺たちなんの話をしてたんだっけ？ ……あつ、そうだ。高梨の古巣の話だ。で、結局どうなんだ？ 仕事は順調なのか」

「ま、まあ……」

仕事の進め方も雰囲気も大きく変わってしまったとはいえ、それまで十年以上働いていたのだ。それほど困っていることはない。しかし、気になっているのは、秘密結社の方だ。入社して二週間経つが、正義総帥からも千智さんからも、追加の指示はなかった。来たのはせいぜい、給与の振込先の銀行口座を教えて欲しいという事務連絡くらいだ。

世界滅亡とやらの計画が進もうと頓挫しようと、今となっては正直どうでもいいのだけど、でも、どうして俺は古巣（あんなところ）で働いているだろう？ という疑問はずっと頭を離れない。

「あまり納得してないって、顔だな？」

こちらの心を読み取つたのだろうか、新田がそんなことを口にした。俺は、友人の顔を見返した。

「俺たち何年の付き合いだ。友だちが悩んでいたらすぐにかかるさ」

良い友を持つたと、泣きたくなってきた。

「やっぱり、派遣っていうのが嫌なのか？ 正社員に比べたら待遇も今ひとつだし、派遣先には気を使うからな」

「いや、そういう訳じゃ。ちなみに待遇自体は悪くない」

「そうなのか。今時、良心的な派遣会社もあるんだな。じゃあ、別の理由があるのか？」

「うまく言えないんだけど、その……このままで良いのかなんて、思うんだ」

「ああ、わかるな、それ」

「えっ？」

まったく頭の中で整理できないまま口にした言葉だったのに、新田が共感を示したので、とても驚いた。

「やっぱり人間って食欲だからさ、大なり小なり、今とは違う経験をしたい、難しい仕事にチャレンジしたいって思うものさ」

「そ、そんなものなのか？ 前に働いていた時はそんなこと思わなかったけど。いかに現状を維持するかってことで頭がいっぱいで……」

「再就職活動をすることで、意識はせずとも考えが変わつたんだろ。俺は良いことだと思っけどな」

「でも、仕事だし……。与えられたことはちゃんとやらないと」

「それは真実だが、義務だけで仕事をしていても辛いぞ。人生の半分以上は仕事に費やしているんだからな。派遣元に話してみたら良いんじゃないか？ もっと違う仕事が見たいですって」

「良いのか？ 会社の命令に意見するってことだろう？」

「構うものか。言うだけならタダだしな。それに社員の言葉に一切耳を貸さないような会社だったら、いくら今の待遇が良くても、早いところ次の会社を見つけた方が良いでしょう、新田は言うものの、彼ほど楽観的にはなれなかった。経緯はともかく、ようやく見つけた再就職先。意見したことをきっかけにまた失うことになったら、と思うと怖かった。でも、今後もずっと派遣が続くのかどうかだけは確認しておいた方が良さそうだ。

意見ではない。確認するだけだ。

それに千智さんなら、いきなりクビを宣告することはないだろう。

5

新田と飲んだ翌週、派遣先に出社した後、千智さんへ、会ってお話したいことがある、とメールを送った。返信はすぐに来た。午後にはアジトへ来てください、と書かれていた。

早退を報告しようとして岩村の席へ向かう。課長はたくさんの数字が羅列されたスプレッドシートを映すPCモニタを、親の仇に向けるような目でじっと睨みつけていた。

「岩村さん、ちょっと良いですか」

「なんだ？」目元をぐりぐりと揉みながら、こちらを見上げてきた。目が充血していた。

「お疲れですね」

「まあな。今日中に用意しないといけない資料がたくさんあるから。上が変わってから、報告も面倒くさくなつたもんだ」

「それは大変ですね」

「本当、大変だったらありやしない。たまにはネットワーク機器のコンフィグをいじりたいよ。派遣の労務管理なんて誰かに任せてさ」

昔から岩村課長は、根っからの現場人間だった。部下の仕事も、最後は自分で手を動かして確認しないと気が済まない。それが、今では報告書作りと会議だけで一日が終わるなんて、昔の岩村の仕事ぶりからは想像できなかった。社員のみならず、岩村課長自身も変わってしまったのだ。

「でも……」課長は続けた。「高梨が戻ってきてくれて、俺は嬉しいよ。勝手知ったる奴がいると、やっぱり仕事が早いからな。派遣だけだと前みたいなのットワークはなかなか出せない」

この言葉には、反感を覚えずにはいられなかった。俺に人員整理対象だと告げたのは岩村本人だ。

「だったら、どうして、派遣ばかりにしたんです？」

課長は洗面を作った。「しようがないだろ。俺も会社員だ。上の方針には逆らえん。養うべき家族だっているしな……で、高梨は俺と世間話をするために来たのか？」

もうこの話を終わらせたいらしい。本当はもう少しなじりたい気持ちもあったが、今はやめておこう。

「午後から、派遣元に行く用事ができたので、早めに失礼させてもらいます」

「そうか、わかった」

とだけ言うと、岩村はPCモニタに視線を戻し、「ふっ」と重たい息を吐いた。

6

午後、二週間ぶりに秘密結社のアジトへやってきた。中は相変わらず本と機械のメイルシュートルーム状態だ。

幹部室で、座り心地抜群の重役椅子に座る。この椅子を派遣先に持っていけないだろうか。今派遣先で使っている椅子は、前職の時に使っていた物よりさらに安物になっていて、とても座り心地が悪い。

すっかりリラックスしていると、千智さんがやってきた。ブラウスの上から紺色の薄手のカーディガンを羽織っていた。今日も綺麗だ。

「こんにちは、高梨さん。派遣先でのお仕事は順調ですか？」

「実は今日、そのことでお話がありました。改めて訊きたいんですけど。こっつて本当はなんですか？」

「ここ、と言うのは？」

「もちろんこのことです」床を指差した。「実はただの派遣業者なんですか？」

「いいえ。秘密結社です。世界滅亡を目的とする」

千智さんははっきりとした声で言った。嘘をついているようにも、冗談を言っているようにも見えない。

「だったら、どうして俺は前の会社に派遣されたんです？何かの当て付けですか？」

ガラリと様変わりしてしまった職場や上司……、昔、自分がそこに居たという痕跡まで失われてしまった。そんなのを見せられても良い気はしない。

千智さんは落ち着いた声で答えた。「そんなつもりは、まったくありません」

「だったらどうして？」

「今の派遣先で上手くいっていないんですか？」

「そういうことじゃないんです。どうして俺があそこで働くのかって理由が知りたいんです」

「理由なんて、必要ですか？」

「えっ……」予想の斜め上をいく質問返しに、面食らった。

「そ、そりゃ……必要でしょう。モチベーションにも関わりますし」

「そう、ですか」

千智さんは納得したとしても取れないような曖昧

な相槌をうった。

「この仕事、俺じゃないといけないんですか？」

「もちろんです」

この質問には、千智さんは力強く頷いてくれた。

「だったら、その理由を教えてください」

「わかりました」千智さんは軽くうなずいた。「高梨さんがそこまでおっしゃるなら、ついて来てください」

残暑厳しい炎天下のなか、千智さんに連れられて、アジト近くの商店街にある銀行へやって来た。通りにはたくさん買い物客たちが行き交っていた。

千智さんは言った。「高梨さんが、秘密結社に入って二週間以上が経ちました。そろそろ研修期間を卒業するテストをして良い頃かもしれません」

「テスト、ですか？」

「ええ、今からここで、大声で歌ってください」

「……はいっ？」

冗談だろう！カラオケ屋で友人数人の前で歌うことすら恥ずかしいと思っているのだ。こんな人通りが多い場所で歌うなんて、拷問に等しい。

「どうして、そんなことをしないといけないんですか？」

「テストだからです」

「いくら何でもそれは。ストリートミュージシャンでもあるまいし。こんなところでスーツ姿の男が歌ったら、アブナイ人だって思われるでしょ」

「でも、時々ニュースで見ませんか？ 新入社員の研修の一環として、人前で大声を出させるといいうのを」

「これも、それと同じだと言いたいんですか？ ……馬鹿馬鹿しい」

一度恥を曝け出すことで、覚悟と結束力を高める。なんて言いたいのだろうか、そんな青臭いことをやる年齢ではない。

「案外そうとも言えません」千智さんは真面目な表情のまま言った。「恥も外聞も気にしていられない時はありますから。それに……、これは世界滅亡に向けた大切な手順でもあります」

人前で歌うことと、世界滅亡とどんな関係があるというのか？ さっぱりわからない。

すると、千智さんはさらりと言ったのけた。

「今からわたしが、秘密結社の資金を集めに、あの銀行を襲います」

「はっ！ 何言ってるんですか、突然」

「ですから、高梨さんはその間、ここで歌を歌って周りの目を引きつけて欲しいんです。じゃあ、お願いしますよ」

「ちよっ、ちよっど待ってください」

呼び止めたものの、千智さんはスタスタと銀行へ向かって歩き出してしまった。

「えっ、えっ、えーっ！」

完全に頭がパニックになってしまった。銀行強盗の共犯者になれだつて！ こんなことになるのなら、大人しく派

遣先で仕事をしていれば良かった。

逃げよう、と最初は思った。しかし、すぐに思い止まった。俺が逃げたら千智さんが捕まってしまう。それは絶対にだめだ。

だったら、彼女を止めるしかない。

しかし、千智さんを追いかけようとした矢先、銀行から、血相を変えた中年男性が、走り去っていくのが見えた。

まずい、もう始まってしまったのだ!

迷っている暇はない。

大きく息を吸って、それから、大声で歌い始めた。

流行歌には疎くて、とっさに出て来たのは、大昔に放送されていたテレビアニメのテーマソングだ。声を張り上げることと精一杯だったから、音程も外しっぱなし。それを歌っているのは、三十代のスーツ姿の男。もし、そんな人間を街角で見かけたら、俺だったら全速力で逃げる。

サビまで歌い切ったところで、喉に痛みを感じて、咳き込んだ。

その頃には、銀行の周辺に、あれだけたくさんいた買い物客が人っ子ひとりいなくなっていた。

「大変すばらしかったです」

千智さんの声でした。彼女は小走りで近づいてきた。

「銀行の中にいたみなさんも、目を丸くしていましたよ」

「あっ、あのう。強盗は？」

千智さんは手ぶらで、札束がたんまり入ったズタ袋は持っていないかった。

「ああ、そんなことするわけじゃないですか。世界滅亡の資金はすでに十分ありますから。わたしは銀行に入つて、高梨さんの様子を見ていただけです」

「なっ、なんだって……」

血相変えて飛び出て来たおっさんは、強盗から逃げ出したわけじゃないんだ。なんて人騒がせな……。

急に体の力が抜けて、その場で尻餅をついてしまった。

「でも、良かった……」

千智さんが犯罪に手を染めなくて。

「そうです、良かったです」千智さんが嬉しそうにうなずいた。「高梨さんが世界滅亡に対して、本当に真剣だということがわかって」

「……えっ？」

「このテスト、さすがに難しいかなって思ってたんですけど。でも、合格です。高梨さん。あなたを本日付で正式に幹部として認めます」

「はっ、はあ……」

えらく勘違いされているような……。でも今は、千智さんの満面の笑顔が見られたから、結果的には良しとしよう。「さあ、早く立ってください。高梨さんの望み通り、世界滅亡の計画をお教えします」

へと首を動かしつつ、手に持った怪しげな機械をじっと睨みつけていた。

「何やってるの、おじいちゃん？」と、千智さん。

「例の件だ。ちょうど今さっき、いいアイデアが閃いてな。試そうとしているところだ」

「えっ、本当に」 神妙な顔つきで千智さんは言った。「上手くいそそう？」

「わしを誰だと思っておる。すべて任せておけ」

「例の件って？」

「漂う緊張感。もしかして、世界滅亡に関することだろうか？」

「ええ。ずっとわたしたちの中で懸案だったんです」 千智さんの表情が陰った。「……その、ゴキブリが」

「はい？」

「ほら、この事務所、古いからよく出るんですよ。それで、おじいちゃんが駆除する機械を作ってくれることになつて。でもこれで、ようやく安心できる」

千智さんは心底安堵した様子で、ほっと息をついた。

「はあ……」 世界滅亡からずいぶんとかけ離れた悩みだ。

「そんなの、市販の駆除剤を使えば良いじゃないですか？」

「こんなに物が散らかっているから、駆除剤だけだとなかなか難しいんです」

「……これも違う」

正義総帥は手にしていた機械を床に投げ捨てた。ガチャガチャと耳障りな音と共に、ガラクタの山を転がり、機械

雑草地帯の一部と同化した。ゴキブリとの戦いはまだまだ長く険しいものになるだろう、と理解した。

「ところでおじいちゃん」 新しい機械を手にした総帥に向かって、千智さんが声をかけた。「あの件について、そろそろ高梨さんにちゃんと説明しようかと思うんだけど」

総帥が視線だけをこちらへ向けてきた。「まだ早くはないか？」

「でも、高梨さんの世界滅亡にかける熱意を、今さっき見せてもらったんです。あの例の試験、合格したんです」

「なんだと！」 総帥は機械を投げ捨てると、今度は上半身もこちらへ向けた。「まさかあの試験を……、なんと未恐

ろしい男よ。しかし、これではつきりとした。高梨くんの世界滅亡にかける意気込みは本物だ。わしの目に狂いはなかったのだ！」

「あつ、いや、それは……」

単に、千智さんが捕まっつてほしくなかったからという理由で、世界滅亡とは関係がない。

「よし」 総帥は器用に車椅子を操作すると、総帥室へ向けて進み始めた。「高梨くん。ついてきなさい」

話が勝手に進んでいく。とはいえ、どうすることもできない。しかたなく後に続いた。

部屋に入ると、総帥は手を高く挙げてパンパンと二度叩いた。すると、モーター音が聞こえ、天井の一角がゆつくりと下がってきた。カラクリ屋敷だ！……しかし、雑居ビルをこんなふうに改造してしまつて良いのだろうか？

腰の高さまで下がった天井板の上には小型のアタッシュケースが載っていた。総帥はそれを膝の上に移動させると、ロックを外した。中はポリウレタンが敷き詰められていて、真ん中に名刺ケースくらいのアلمミ箱が収められていた。「これを、君に託そう」

正義総帥がアアルミ箱をこちらに差し出してきた。これだけ嚴重に保管されていたのだ、とても貴重なものに違いないと思うと、自然と体が緊張してきた。

「なんですか、これは？」

「開けてみなさい」

言われた通りに、アアルミ箱を開けた。

「……USBメモリ？」

摘み上げてみた。表面は黒一色でメーカーのロゴは見当たらないが、形状は家電量販店で売られているものと変わらない。

大山が鳴動したものの、出てきたのは鼠一匹と思ったが、総帥の表情は依然厳しい。

「その中には、コンピュータウイルスが入っている」

「えっ？」

反射的に、手を離してしまった。USBメモリはアアルミ箱の中に落ちたが、もう数ミリずれていたら、ガラクタジヤングルの奥底へ消えてしまうところだった。

総帥が怒鳴った。「おい、大事に扱え！ それは愉快犯が扱うような単純なウイルスじゃない。特別仕様なんだ」

「……こ、こんなの俺に渡して、何をさせるつもりなん

ですか？」

「高梨くんに行ってもらっている会社のサーバーに、このウイルスを仕込んでもらいたい」

「ちよっ、ちよっど待ってください。それって、犯罪ですよね」

「それがどうした？」正義総帥は今日の天気を答えるかのように抑揚のない声で言った。「我々は今から世界滅亡という大業を為そうとしておるのだぞ。ならば、サーバーにウイルスを仕込むなど大したことはあるまい」

「それはその、そうかもしれないが……。いや、そうじゃなくて。本気で人類を滅亡させるつもりなんですか？」

「何を言っておるのだ？ あれだけの武勇を見せておきなから。君はそのためにこの秘密結社に入ったんだらう」

「そのう、今ひとつ現実味がなくて……」

雑居ビルの片隅で、ゴキブリ駆除装置を作っている老人から世界滅亡などと言われても、やはり冗談にしか聞こえない。

「我が完璧な計画のどこに、現実味がないと言うのだ？」

「だから、その計画の全容をまだ俺は聞いてないんです。

このウイルスも世界滅亡計画の一環なんですか？」

「無論じゃ」

あの会社のサーバールームでは、自社の基幹データや、他社顧客から預かっているデータが管理されていて、もしウイルスに感染すれば、もちろん多くの被害が出るだろうとはいえ、とても世界滅亡へ到ると思えない。原子力発

電所の管理システムでも扱ってあげれば話は違ってくるだろうが、もちろん、あそこにそんなものは存在しない。

「じゃあ、どうしてウィルスを仕込むんですか？ それに、感染させたらどうなるんですか？」

総帥はしばらくの間、思案気な顔で俺を見ていたが、やがて小さなため息をついた。

「その先の話は、無事ウィルスの感染に成功したら教えてやろう。高梨くん、わしの計画についてまだ十分信じ切れておらんようだな。その君に今の時点で全てを明かすのは危険じゃ」

凶星だ。しかしそもそも、その先の計画があるかどうか怪しい。

「だが、わしは利用できるものならなんでも利用する。例えば……」正義総帥は、獲物に狙いを済ませた猛禽類のような目でこちらを見つめた。「たとえわしの計画を疑っていたとしても、君個人として、晴らしたい恨みの一つや二つはあるだろう。前の職場についても」

「そ、それは……」

長いこと世話になった会社だ。社会人としても技術者としてもいろいろ教えてもらった。感謝はしている。しかし、自分とはまったく関係のないところで起こったスキャンダルをきっかけに会社が傾き、突然の人員整理勧告。そのせいで辛く不安な再就職活動が続いた。そこに恨みがないと言えば嘘になる。

「そいつらに、復讐してやろうとは思わないか？」低い声

と共に、総帥を乗せた車椅子がゆっくりと近づいてくる。

「君が仕込んだウィルスによって、会社が大混乱に陥り、世間から厳しい制裁を受ける。それを高みから見物しようじゃないか」

「……」

俺たちを切り捨てて、のうのと生きながらえた悪い連中へ天誅を喰らわす……。魅力的な提案だ。これがテレビドラマだったら、カタルシス満点で高視聴率間違いなしだ。しかし、いざ自分がそのドラマの主人公になれと言われると……、理性が反発する。

「で、でも、やっぱり犯罪は……」

正義総帥はフンツと鼻で笑った。「露見して、他人から非難されることを恐れておるのか？」

「それは……。もちろん、そうですよ」

他人の目があることで理性が働き、人は社会的生活を送れるのだ。

「世界滅亡の前では、些細なことだ」総帥は首を左右に振った。「まあ、案ずるな。そのウィルスは非常に特殊で、サーバーに侵入しても、市販のウィルスソフト程度で気づかれることはない」

「そうだとしても……」

やはり、犯罪は犯罪だ。

「堅物め。常識がそんなに大切か？」総帥は苛立たしげに言った。

「それは、大事でしょ」

「高梨さん」それまでずっと黙っていた千智さんが声をかけてきた。「おじいちゃんを助けてくれませんか。どうか、この通りです」

千智さんが深々と頭を下げてきたので、さすがに狼狽した。

「や、やめてください。俺なんかに頭を下げるなんて」

常識的な対応をしたはずなのに、罪悪感を覚え始めた。

「この仕事は、高梨さんにしか頼めないんです」

千智さんの言葉に、どくりと心臓が高鳴った。

——俺にしか、できない仕事……。

本능が理性を大きく上回った。彼女に頼られてしまった以上、首を縦に振らないという選択肢は取れない。

激しい葛藤に襲われていると、正義総帥が言った。

「ではこうしよう。このウィルスは、今後の世界滅亡計画を大きく左右する重要な任務だ。ゆえに成功すれば特別ボーナスを出す」

最後の手段として金で揺さぶる気らしい。高まっていた気持ちが一瞬にして墜落してしまった。人の気持ちを金でどうこうしようなど、なんて浅はかな。

総帥は三本の指を立てた。

「……三万？」

人生を賭けるには馬鹿馬鹿すぎる値段だ。

すると、総帥は首を振った。

「三十万？」

話にならない。

しかし、総帥は再び首を振った。

「もしかして……、三百万？」

少し悩む金額だ。

ところが、総帥は三度首を振った。

「そんなはした金では、功績に報いることなどできぬ」

「じゃあ、……三千万！」

総帥は苛立たしげな声で言った。

「馬鹿者、三十億じゃ」